

近現代史集中学習講座

第1回 明治維新から第1次世界大戦まで

明治大学文学部（日本現代史）山田 朗

1 近代外交（膨張志向と列強との協調）の起点としての明治維新

《膨張志向》

[1] 日清修好条規（1871）と琉球処分（1872 琉球藩設置、1879 沖縄県設置）

→ 列強の清国侵食に歩調をあわせ、〈中華帝国システム〉（冊封体制）の一角を崩そうとする

[2] 台湾出兵（1874）、「征韓論」（1873）、江華島事件（1875）と日朝修好条規（1876）

《列強との協調》

[1] 不平等条約（1854 日米和親条約、1858 日米修好通商条約など一連の条約）

→ 治外法権（領事裁判権）・最恵国待遇・関税自主権

[2] 樺太・千島交換条約（1875） → ロシアとの摩擦を回避

2 対外膨張戦略の形成

[1] 対ロシア戦略としての膨張・軍拡論の始まり → 【資料1】

イギリスから提供された反ロシア情報

[2] 「主権線」（国境線）を守るためには「利益線」を確保する、という考え方

明治政府指導者たちの基本的戦略発想 → 【資料2】

ロシアが朝鮮半島に進出しないうちに先手を打ってそこに進出しておく

3 日清・日露戦争による“植民地帝国”化……近代日本の転換期

[1] 日清戦争勝利による植民地（台湾など）獲得、異民族支配の始まり

→ 戦争が終わってから日本軍は台湾に上陸、占領、抵抗勢力を掃討

[2] 日露戦争勝利による韓国併合（朝鮮を「主権線」化）、南満州を新「利益線」に

朝鮮半島 → 南満州 → 北満州 → 華北 という膨張の始まり

ロシアとの満洲分割 → アメリカとの対立の伏線に

[3] 日露戦争の意義

日英同盟の決定的役割：軍事・財政・情報面で日本を支援

アジア諸民族（韓国民除く）は一定の勇気を得たが、日本にはその意図なし

日英同盟・日露協約・日仏協約・桂タフト協定で欧米のアジア支配容認

日本軍部：数々の失敗を「成功」と総括

「大国」「一等国」意識の蔓延 → のちの失敗の伏線に

4 第1次大戦を契機とする新たな膨張・南進

[1] 中国本土への政治的・経済的進出（1915年「対華21カ条要求」）

[2] 旧ドイツ利権・植民地の継承（山東半島・南洋諸島）

→ 中国における民族主義、国家統一の動きを加速 → 国民政府による北伐へ

[3] 国家指導者、第1次世界大戦後の世界の変動を読めず

→ 「民族自決」の潮流を見誤る（とりわけ中国の動向を読めず）

→ 20世紀に19世紀的な膨張主義を続行

【資料1】山県有朋兵部大輔ほか「軍備意見書」 1871（明治4）年12月24日

[前略] 謹んで案するに兵部即今の目途は内に在り将来の目途は外にあり 然とも詳かに之を論ずれば内外猶一の如し未だ始より分別す可からず 何となれば外に備ふるの目途既に立ち措置其宜きを得は内事は憂ふるに足らず [中略] 抑復古以来制度日に新に月に就に遂に当今郡県の真治に帰し藩兵を解き天下の兵器を収め海内の形勢始めて一変す 是の時に当りて豈宜く速かに廟謨を定め外に備ふるの目途を確定せざる可けんや

兵部の議其一に曰く内地の守備を設く 其目二つあり曰く常備兵曰く予備兵 [中略 = 欧米の制度の説明] 故に常備の設けは方今第一の急務一日も猶予す可からず 宜しく府県地方大小広狭に応じ勇敢健壯の丁男を撰ひ之れに教ゆるに洋式陣法を以てし練磨習熟せしめ臨機の用に供す可し 所謂予備兵は常に隊団中に在らず平時は放つて家に帰らしめ事ある日調発差遣する者なり [中略 = プロシア大勝の要因]

其二に曰く沿岸の防御を定む 則ち戦艦を造る也海岸砲台を築く也 夫れ戦艦は運轉活機の砲台也 皇国沿海万里四面皆敵衝なれば悉く砲台を駢列し之か備へを為

す能はず 故に海軍を皇張し至大の軍艦を造り砲台の及はざる所を援け内地を保護す可し [中略]

其三に曰く海陸兩軍の資本を造くる 其目三つあり曰く兵学寮曰く造兵司曰く武庫司 [中略]

……故に政を為す者は宜しく先つ天下大勢の緩急先後を察して以て之か施設措置を為さる可けんや 窃に見るに方今魯西亜頗る驕傲猖獗嚮に「セハストホール」の盟約*を破り黒海に戦艦を繋ぎ南は回々諸国を略取し手を印度に箸け西は満州の境を越へ黒竜江に上下せんとす 其意以らく東方未だ遽かに動かす可からず故に兵を蝦夷に出し北風に乗して温地に趣かんとす 此時に当り皇国の大勢孰れか急にして最も先んず可き者そ 今常備精兵を備へ無数の予備兵を設け戦艦を造り砲台を築き将士を育し器械弾薬を製造貯蔵するに至ては国家実に其費用に勝ゆ可からずと雖も是れ必要の大事止めんと欲して止むへからず備へさらんと欲すとも一日も備へざる可からざるものなり 今日四海万国然らざるなし況や北門の強敵日に迫らんとするの秋に於て豈之れか大計を建さる可けんや若し夫れ施設の方法養兵造艦其他一切の計算に於ては後日を待て詳悉上陳せん 是則兵部当今の方法なり即ち将来の目途也謹んで議す

兵部大輔 山県有朋／兵部少輔 川村純義／兵部少輔 西郷従道

註：クリミア戦争（露 VS 英・仏・土、1853-54）終結に際してのパリ和約。黒海~~中~~の武装化等を定めた。

出典：大山梓編『山県有朋意見書』（原書房、1966年）43-46頁。原文は旧字・カタカナ。

【資料2】山県有朋総理大臣「外交政略論」（1890年3月）

[前略] 国家独立自衛の道二つあり 一に曰く主権線を守禦し他人の侵害を容れず 二に曰く利益線を防護し自己の形勝を失はず 何をか主権線と謂ふ疆土是なり 何をか利益線といふ隣国接触の勢我か主権線の安危と緊しく相関係するの区域是なり 凡国として主権線を有たざるはなく又均しく其利益線を有たざるはなし 而して外交及兵備の要訣は専ら此の二線の基礎に存立する者なり 方今列国の際に立て国

家の独立を維持せんとせば独り主権線を守禦するを以て足れりとせず 必や進て利益線を防護し常に形勝の位置に立たざる可らず 利益線を防護するの道如何 各国の為す所苟も我に不利なる者あるときは我れ責任を帯ひて之を排除し已むを得ざる時は強力を用ゐて我か意志を達するに在り 蓋利益線を防護すること能はざるの国は其主権線を退守せんとするも亦他国の援助に倚り纔かに侵害を免るゝ者にして仍完全なる独立の邦国たることを望む可からざるなり [中略]

我邦利益線の焦点は実に朝鮮に在り 西伯利鉄道は已に中央亜細亜に進み其数年を出すして竣功するに豈我か利益線に向き最も急劇なる刺衝を感じる者に非らず
出典：大山梓編『山県有朋意見書』（原書房、1966年）196-200頁。

【参考文献】

- [1] 芝原拓自『日本近代化の世界史的位置』（岩波書店、1981年）
- [2] 藤原彰『日本軍事史 戦前編』（日本評論社、1987年）
- [3] 山田朗編『外交資料 近代日本の膨張と侵略』（新日本出版社、1997年）
- [4] 山田朗『軍備拡張の近代史—日本軍の膨張と崩壊—』（吉川弘文館、1997年）
- [5] 山田朗『世界史の中の日露戦争』（吉川弘文館、2009年）